寄稿文

飯泉　滋先生の御退官に際して

高木哲一*

飯泉先生におかれましては，長い大学教官のお仕事本当にご苦労様でした．深成岩研究一筋に投入され，特に中国地方の花崗岩研究に大きな業績を残されたことに心より敬意を表します．

多くの卒・修論生，団研などを指導されながら，鳥取花崗岩と呼ばれる巨大バソリスをいくつかの岩体・岩相に区分しその内部構造を明らかにしたこと，山陰帯花崗岩類・火山岩類を詳細な野外調査に基づき複数の活動ステージに区分したこと，Sr–Nd 同位体比を用いて中国地方における花崗岩質マグマの起源物質の水平的変化を明らかにしたこと等々，1970 年代まで霧の中にあった中国地方の花崗岩類の形成過程を明らかにされた業績は，日本の花崗岩研究史上で特筆すべきことと思います．また，これらの研究を進めるにあたって，他大学に先んじて島根大学に蛍光 X 線分析装置を導入・整備し，花崗岩類の全岩化学組成データを大量に生産したことも先生の大きな功績です．さらに，1988 年に世界の花崗岩研究者を島根大学に集めて開催された国際研究集会（IGCP P 220）では，事務局の中心となって活躍されました．

飯泉先生のご指導のうち，「岩石の研究は，実は野外調査と顕微鏡観察で大方の勝負がついてしまう」という言葉が一番印象深く，今でも私の研究の基礎にあります．この言葉は，それらの観察のみで十分だという意味ではなく，岩石の産状や鏡下での鉱物の組合せ・組織などの詳細な観察を十分に行い，岩石の成因に関する十分な見通しを持たなければ，いかに微量成分分析や各種同位体分析を精密に行ったとしても良い研究成果は得られない，という意味と理解しています．この言葉の重みは，何よりも先生の業績が良く物語っています．また，私自身も鉱床研究において，野外調査，岩石記載の重要さを日々実感しているところです．最近，研究所・大学では研究者を単に論文数で評価する傾向がとみに強くなり，論文数を稼ぐためには時間と手間のかかるフィールドワークはやっていられない，という風潮があります．私は，この風潮が結果的に日本の地質学・岩石学の地盤沈下を招くのではないかと危惧しています．

花崗岩研究の最大の課題は巨大バソリスの成因であると私は考えています．巨大バソリスは均質・塊状で鉱物組み合せも単純な難物であり，未だに説得力ある成因論がありません．その成因解明には，なぜそれほど大量・均質な珪長質マグマが短い期間に形成され，巨大な空間を占めて定置できたのか，という問題を解決しなければなりませんが，それにはもう一度飯泉先生のご指導，すなわち野外の産状と岩石記載に立ち返る必要性を感じています．近年，花崗岩を扱う大学教官も学生も減る一方ですし，研究手法もシミュレーションや実験が主体になりつつあります．しかし，島大生には，これらの時流にある程度対応しつつも，あくまでフィールドと岩石記載に立脚した花崗岩研究に積極的に取り組んで欲しいと思います．飯泉先生には，これからも日本の深成岩研究を強くご指導していただくことを期待してやみません．

*昭和 60 年度卒業，独立行政法人産業技術総合研究所深部地質環境研究センター主任研究員